

論文審査の結果の要旨

報告番号	博(生)乙第42号	氏名	松田 雅子
学位審査委員	主査 戸田 清 副査 谷村 賢治 副査 菅原 潤 副査 吉田 謙太郎		
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>松田雅子氏は、昭和62(1987)年3月に九州大学大学院文学研究科修士課程を修了、昭和63(1988)年3月に同博士課程中退、同年4月に長崎外国語短期大学講師、平成7(1995)年1月に同助教授、平成10(1998)年に長崎大学環境科学部助教授、平成20(2008)年に同准教授となり、現在に至っている。長年イギリス文学、そして近年はカナダ文学に重点を移しながら、英語、英文学の研究、教育に取り組んできた。平成25(2013)年5月に主論文『マーガレット・アトウッドの軌跡—カナダの文化的自立からグローバルな環境問題へ—』として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文4編(うち審査付き論文4編)、学位論文の基礎となる論文1編、その他の論文3編を付して、博士(学術)の学位を申請した。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、平成25(2013)年7月17日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は、主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を平成25(2013)年9月4日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>以下論文内容要旨</p> <p>1961年に詩集『ダブル・ペルセポネ』を出版し、作家としてスタートを切ったアトウッドは、1985年の長編小説『侍女の物語』で国際的な評価を確立する。その後現在までに、カナダを代表する作家として成長を遂げ、作家・詩人・批評家として多大な業績を積み重ねていった。カナダ文学のキーワードを「サバイバル」ととらえ、女性・移民・労働者の立場から創作を重ねていった。その後、文学者の社会的使命を意識するアトウッドは、カナダの文化的自立を達成した方法を地球環境問題に応用し、「環境と文学」というテーマで、現代文明批評と人類のサバイバルを考察する作品を著わしている。</p> <p>本論文では、円熟期の代表的作品である5つの長編小説を選び、評論集『サバイバル』と『負債と報い』と共に分析を試みた。アトウッドは、文学作品の分析によって精神的な地図を描き、そうすることでカナダ的なアイデンティティ探究の達成に貢献することができた。その後、グローバル</p>			

資本主義や地球環境問題を展望していくときに、そのやり方を応用し、現代社会の分析にその力を存分に発揮している。本論文は、このようなアトウッドの作家としての軌跡を辿ろうとする試みである。

アトウッドの長編小説『侍女の物語』『キャッツ・アイ』『またの名をグレイス』『昏き目の暗殺者』『オリクスとクレイク』を通じてのテーマとして、本論文では「カナダ女性のアイデンティティ探究」と「現代文明批評」の2点を取り上げた。カナダを舞台にした作品で、移民国家カナダの歴史が明らかにされる。労働によって自立し、独立をめざす考え方がカナダ社会の女性の生き方の根底にあることを示し、また、家父長制的な社会で分断されがちな女性同士の関係が改善されなければならないという方向性も示されている。

また、若き日にラドクリフ女子大に留学していたアトウッドは、1980年代レーガン政権下のアメリカのキリスト教原理主義の台頭に危機感を感じ、宗教的独裁へと移行しかねない政治的風潮に対し、警告の意味を込めて『侍女の物語』を世に問うた。さらに21世紀に入ってから『オリクスとクレイク』では、人類の滅亡が射程に入った未来社会が描かれている。

アトウッドの作品では、プロットが作品ごとに変化のある面白い展開をみせ、読者を驚かせたいという創作上の思いが強い。アトウッドの作品の人気は、この娯楽性と、テーマが時宜に適っていること、テーマを表すための技法が絶妙であることなどがあげられる。しかし、登場人物やその人間関係には冷たいものがある。

子ども時代のいじめのトラウマが原因であるかもしれないが、冷たい女性像はカナダ文学の女性像の典型でもある。作家自身も、この点に気がついていて、人間像とその関係性を発展させようと試みているので、それを跡づけて論じた。

アトウッドは、1960年代のカナダの文化的アイデンティティを模索する大きなうねりの中で、詩人として小説家として成長を遂げ、ローカルな場における問題、辺境と周縁におけるサバイバルをテーマにしなが、次第にグローバルな地球環境の悪化と人類のサバイバルについて関心を広げていった。カナダ人として自分たちの体験を確認しながら、未来への希望を示すという方向性が、人類のサバイバルの問題へと発展していったのである。このような創造的な展開の原動力になっているのは、アトウッドが若き日に受けた、ノースロップ・フライの薫育の賜物であろう。

想像力は芸術的な機能と同時に、社会的で実践的な機能も持っていると言ったフライは説いた。それゆえに、文学者は批評や創作活動によって人々の想像力を陶冶し、読者の人生における希望やあるべき社会を構想する力を養うのである。

人類のサバイバルが喫緊の問題となっている現代において、このような想像力の可能性を最大に利用しながら、「マッドアダム三部作」や『負債と報い』など環境と文学をテーマにした作品を創造することによって、社会変革の途を探るアトウッドの姿勢は、ポストコロニアリズムとフェミニズムの作家を越えて、世界を牽引する文学的リーダーの姿を示している。

とくに、『負債と報い』は、批評、文学史、創作を駆使して、現代文明の危機に一石を投げよう

とする試みである。「人類の科学技術システムは、人が注文したいと思うものを何でも引き出せる碾き臼で、その機械の止め方を誰も知らない」という比喻で、現代の状況に対して明確なイメージを描いている。

しかしながら、科学技術という現代の碾き臼が挽き出すものによって、すべての人が何らかの形で恩恵を被っている。そこから抜け出すためには、成長戦略や欲望などとは違ったコンセプトとアイデアが必要となってくる。環境保護に対する問題提起と、行動を起こさなければならない重要性は示されたが、その具体策はいまだ示されていない。アトウッドのさらなる思想的な展開が待たれている。

以上のように本論文は、カナダの作家アトウッドの円熟期の5つの長編小説の分析を通じて「カナダ女性のアイデンティティ探究」と「現代文明批評」というテーマがどのように追求されているかを明らかにし、グローバル化時代の「超大国の隣国」における文化的自立の探求や、科学技術の「暴走」と地球環境危機の時代の思考実験（未来社会小説など）における文学的想像力の役割の一端を明らかにしたものと評価できる。

学位審査委員会は、グローバル化と地球環境危機の時代における文学的想像力の役割の一端を明らかにすることを通じて、現代文明の問題点の学術的解明に貢献するところが大きいことから、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。